

地藏講の思い出

中村 由子

(会員・弥生町江良)

川又部落は旧上野村の一角で、東側出入口の両側は丘で、後方は山を背負った半円形の中に、僅か十戸余りの農家が、細々と生計をたてていた山里であった。

生家の裏山三十m程へだてた小高い丘に川又寺跡がある。大永七年(一五二七)臼杵長景が川又寺に本陣を置き柵牟礼城を包囲し、城主佐伯惟治に和議を申込み開城するとある。(弥生町文化史)その数々の秘話を包んだ有名な戦国山城柵牟礼城(主峯二二三・六m)を間近に望み、山裾の流れは瀬となり洑となり、今も清く美しい。

時おり私は小学校の頃、私の家で行われた川又部落の地藏講を懐かしく思い出す。

大正九年、私が小学校三年の時である。川又ではいつ

頃からか月一回廻り持ちで地藏講が行われていた。現在でも行われているのかどうか、私は他村に嫁いだので知らない。地藏講の由来もわからず、今になってみれば、古老に聞いておけばよかったと後悔している。

地藏で思い出すが、その頃川又寺跡には小さな庵があった。庵主様に先だたれた奥さんが(有髪の尼僧)子供二人と共に御仏に仕えていたが、その合間に近所の子女に、行儀見習や裁縫を教えていた。どこから移り住まれた方か知らないが、実にりっぱな方で田舎人には見えなかった。

人の集まる所には子供が群がるというが、その庵にも子供達がよく遊びに行った。狭い庭先には幾体かのお地藏様が祭られており、庵主さんの心尽しで、地藏様の一体一体には真新しい前掛がしてあった。子供達はそれを見つけて自分々々の首や胸にかけ、喜んで庭先を「ケンケンパ、ケンケンパ」と言いながら飛び跳ねた。

騒々しい様子に、庵尼さんが障子からそーとのぞくと、あの優しい顔が急に険しくなり、前掛は有無をいわずに取りあげられた。驚いた子供達は石段をかけ下りながら途中から振り向き「アカンペー」をして逃げて行ったも

のだった。

ある日、友達と遊んでいると母がやって来て「お前達お使いをしておくれ。こいさ、うちで地藏講をするきい詣っておくれと、みんなかてふれて来ておくれ。」私達はウンウンとうなずきながら、一軒一軒ふれて歩いた。

最後の一軒になった時、急にけたたましい声があった。見ると、六年生の徳兄が、帽子をかぶりだつのうを肩にかけ、着物の裾をまくって走って来る。その後をおばあさんが手を振りながら「徳市う止めてくりー」と言ってくる。三人はとんで行って道をふさいだ。徳兄は怒って「こらー、どかんか、こずくぞ」とどなっている間に、おばあさんがハハハいいながらやって来た。この追っかけごっこの訳というのが傑作であった。

徳兄が学校から帰った時「おばあ、今戻ったぞ」と声をかけたが、おばあさんは仕事の手が離せず「おお、戻ったか」と声だけかけた。暫らく音もしないので出て見ると、徳兄は暖い日ざしをいっばいうけて、木戸口の敷居に腰をかけ、柱にのしかかったまゝ眠っていた。おばあさんが「徳々、早う起きんか」と肩をたたくと、ムクツと立上るが早い「学校に行くぞ」と一目散に駆け出

したということであった。

いよいよ地藏講の夜となり、おばあさん達は全員集まって、半畳敷大のいろりを囲む。焚き火はゆらゆら燃え、自在鉤の湯はシャンシャン音をたてる。ランプの灯でみんなの顔は赤黒く屈託のない健康そのものだ。お茶を飲んで座敷の床柱に掛けられたお絵様に、何やら口々にお経を唱え終るとまたいろりを囲む。いよいよこれからがお楽しみである。

お茶と小麦餅（小麦粉をねり、といもの輪切りを入れて蒸したもの）と野菜の煮つけを平大鉢に二皿（大根、人じん・ごぼう・里芋・ぜんまい・手作りこんにやく）が並べられる。当時は化学調味料はなく椎茸さえ使えなかった。それでも結構おいしく、お茶を飲み、食らって話に花が咲いた。

「新米ができたきい男衆い山芋掘りに行くんと。」

「次ん日にゃ、うちい粃すりするきい二人程手を借いてほしい」と。

当時の粃すり曰は竹の小割りと粘土を巧みに使った大臼で、元すりを男一人、かけや（ふたまたになった榎木）に横木を添え、三人で持ち計四人で動かす。すった粃は

更に唐箕とうみにかけて穀殻を除き、千石で玄米を選別する。

午前二時頃起きて仕事を始め、夕方までかかってやっと何俵位いしかできない時代であった。米は貴重で、米飯は盆・正月・祭しか口に入らず、常時は麦の中に米が入っているという御飯であった。その頃は金肥きんぴも農薬もなく、収穫は少なかつた。

「雨降りゃ草履ぞうり作りゆしようや」

「食う米いねえき、米搗つきゅうせにゃ。お前かたん唐から臼うす借りてくりいの」

「仕事いあらましなりや、津久見にみかんかるいに行こうや」という。

私もついで行つたことがある。朝早く床木の奥から津久見に通ずる小道を、機はたを織はつて作つた木綿の着物を歩きやすいように短かく着て、裾がすり切れないように腰巻を少し長くし、皆それぞれに自分の格好に大満足といつた出で立ちであつた。古布で袋を縫い、くずみかん用、よいみかん用と入れ分け、黒の大風呂敷に包んで背中にかるい、何度も何度も休みながら帰りつくつと、もう夕暮時で行く時の品の良さは見るかげもなかつた。

しばらく話がとぎれると、中年のおばあさんが、モン

モンと話し出す。

「米吉ぢいさんのう、とりつめちよるんじゃ、いつ死ぬかわからんのじゃ。お前ん綿帽子借いてくれんか」
当時葬式は三〇〇m程へだてた田や畑に囲まれた墓地で行われ、火葬場はなく、ほとんど土葬だつた。問題の綿帽子は、野辺送りの時婦女子が頭からすっぽりかぶり、白木綿もめん何反分かを結び合わせた長い布を、一m位の間隔でお供の人が持ち、僧侶のならばチン・トン・カンの鐘と共に静々と葬儀場に歩いて行つた。

話が大体終るといよいよ唄が出る。踊がでる。今考えてみると、あんな唄や踊が流行していたのだろうかと思ふ。うろ覚えだが思い出すまゝかなで書いてみよう。

とうかえびすの　うりものは

こぼんにかねばこ　たてえぼし

おささをついで　ちどりあし

やまぶきやうわきで　トッチンリッンシャン

ハ　トッチンリッンシャン

唄と踊で夜も次第に更けて行く。彼女達がおみこしをあげた時は皿には何一つ残つてなかつた。